



NANASHINO-TOUHOKU KENJIN
VALKYRIES
1941
SABRA AGAINST MECHASABRA

登場人物

■ サブラ・グリーンゴールド

本作の主人公。

シャローム学園所属のヴァルキリー。

シャローム学園軍中佐であり、海軍特殊部隊シャイエテット13に所属している。

イスラエルの国益のためならばありとあらゆる悪行を正当化する人間の屑である。

S中佐という姉妹同然の親友がおり、声や容姿、髪型、身長、体重、腹筋の割れ方まで酷似しているが決して同一人物ではない。

■ レア・アンシエル

シャローム学園所属のヴァルキリー。

サブラとは旧知の仲。

アルカにおいては希有な人間の鑑である。

サブラ・グリーンゴールドとS中佐の秘密を知る数少ない人物の一人。

■ メカサブラM式改

グレン&グレンダ社所属の対サブラ用戦闘マシン。

サブラとの戦闘で撃破されたメカサブラ一号機及び二号機の残骸に新造パーツを加えて開発されており、最大火力のみはスーパーパーメカサブラに劣るが、安定性と戦闘可能時間で大きく上回り特に冷却系と近接戦闘能力の大幅な強化が図られている。

■ ユライヤ・サンダーランド

ガーランド・ハイスクール所属のヴァルキリー。

かつてはタスクフォース420を指揮するエリートだった
第四次ダイヤモンド戦争でサブラに殺害されたはずだったが……。

■ アブラス

二十一世紀のグレン&グレンダ社残党がサブラのデータを使って製造したヴァルキリー。
オリジナルのサブラを遥かに凌ぐ圧倒的な戦闘能力を誇る。

■ マリア・パステルナーク

元ヴォルクグラード学園軍大佐及びヴォルクグラード人民学園生徒会長。
生前はアルカ最高の英雄と呼ばれていた優秀なヴァルキリーだったがその正体は自らの
権力基盤を盤石なものにするため反対派の生徒達を虐殺した人間の屑である。

■ エーリヒ・シュヴァンクマイエル

民間軍事企業スピリットウルフ社の最高責任者。
シュネーヴァルト学園軍時代にはタスクフォース609を指揮した人間の屑である。

■ ソノカ・リントベルク

民間軍事企業スピリットウルフ社に所属するヴァルキリー。
タスクフォース609の元メンバーであり戦争狂にして自他共に認める皮肉屋。
空飛ぶスパゲッティ・モンスター教の教えに従い平気で人を殺す人間の屑である。

用語

■ アポカリプス・ナウ

一八〇〇年代の末期、地球に突如到着した隕石によってもたらされた大災害と、それがかきつけとなって始まり、その後十五年間続いた世界規模の戦争。

■ アルカ

隕石落下後の世界を事実上支配している巨大多国籍企業グレン&グレンダ社が考案した、学園同士が世界各国の代理戦争を行う場所。

日本の山形県がそのまま使われており、かつての市や町の一つ一つに各国の拠点となる学園都市や軍事施設が配置されている。

■ B F

アルカで代理戦争が行われる場所、通称バトルフィールドの略称。毎回異なった勝利条件と敗北条件が設定される。

■ プロトタイプ

世界各国の代理勢力たる学園の根幹を成す戦闘用の人造人間。

■ ヴァルキリー

プロトタイプの中にごく僅かに存在する、地球に落下した隕石内に含まれていたマナ・クリスタルという鉱石とそれから得られるマナ・エネルギーとの親和性を有した少女達。液体状のマナ・エネルギーが固着・形成されるマナ・ローブを纏うことで戦車の装甲と火力、戦闘機の数と機動性を人間サイズで実現している。

背部ユニットを使つての単独飛行やマナ・フィールドと呼ばれる防御障壁の即時展開が可能であるだけではなく、マナ・クリスタルの使用者次第ではグレン&グレンダ社によりブラックボックス化されたマナ・エネルギー兵器を使用することができる。

■ シヤローム学園

アルカにおけるイスラエルの代理勢力。

学園都市はアルカ西部のツルオカスタン・カモ自治区にある。

■ スピリットウルフ社

通称 S W 社。

エーリヒ・シュヴァンクマイエルが立ち上げた民間軍事企業。
アルカ最大の規模を誇り、イスラエルとの結託により絶対的な地位を築きつつある。

■ ダークホーム社

通称 D H 社。

キャロライン・ダークホームを最高責任者とする民間軍事企業。
シエアを巡り S W 社と激しい抗争を繰り広げていたが、現在は事実上の崩壊状態にある。

■ モサド

イスラエル諜報特務庁及びシヤローム学園諜報特務庁。

情報収集だけではなく要人誘拐及び暗殺にも長けており、一度ターゲットになればその魔の手から絶対に逃れることはできない。

■ D R F L A

アルカ解放のための民主的改革運動を名乗る反イスラエル武装勢力。

■ 第四次ダイヤモンド戦争

一九四九年にアルカで行われたイスラエルとソ連の代理戦争。
アンゴラのダイヤモンド採掘権を巡る戦争でありシヤローム学園が勝利した。

■ フレガータ学校占拠事件

一九四七年にフレガータ小学校をテロリストが占拠した事件。
グレン&グレンダ社はこの際、校内に突入したヴォルクグラード人民学園の特殊部隊が
人質となっていた同社社員の子供達諸共テロリストを殲滅したと公表したが、後にそれは
悪意に満ちた嘘であることを作戦に参加した隊員から暴露されてしまった。

酸素泥棒（ヒューマンダスト）の異世界チート転生記

一九五〇年九月十日。

被弾して操縦不能に陥ったシャローム学園空軍のA・1スカイリーダーが青空に黒煙を残しながら激戦続くショナイ平原の大地に激突し、大爆発と同時にアルカ北西部に広がる古戦場にダビデの星が描かれた迷彩色の主翼を突き刺した。

「生きるのよ！」

米国製高性能戦闘爆撃機の墜落地点以外にもあちこちから油臭い炎を立ち昇らせているBFの中を一人の傷付いたヴァルキリーが自分と同じように濃緑色のマナ・ローブに身を包み、自分以上の深手で虫の息となっている戦友を背負って進む。

「明日また生きる！」

額から滴る鮮血を顎先から落とすつつ、心身双方の疲労のせいで鉛のように重い両足を炎上するセンチリオン中戦車やM3ハーフトラックの残骸横で必死で前へ前へと動かす少女はだらりと頭と手を垂らす虫の息の戦乙女を叱咤する。叫びが鼓膜を打つ度に背中におぶさる仲間の意識は死と生の境界線からこちら側の世界へと引き寄せられた。

「生き残ること——それが、最大の復讐に……！」

重なり合う不快な嘲笑を耳にして肩越しに振り向いたヴァルキリーは国家間代理戦争を行うためBFに展開中の自分達に突然の奇襲を仕掛け、甚大な損害を与えたメイド然かつ

カラフルな軍服を纏う冗談めいた姿の少女達が我が物顔で空を進む姿を見やる。

「復讐なんて何も生まないよ！」

ピンクの髪を持つクローンヴァルキリーは溜め池で溺れる子犬同然の敵を見て微笑み、ごく一般的なものに比べて二回り程小さいサイズと両翼を持つ背部飛行ユニットから青いマナ・エネルギー粒子による光跡を輝かせて急降下した。

「憎しみだけの人生なんて間違ってるよ！」

知ったような口調で言い放ちながら突出したクローンヴァルキリーにRPK軽機関銃の錆一つない銃口を向けられたイスラエルの尖兵は死を決意する。

「残念ですが数の優位を揃えたとしても、圧倒的な質の差を覆すことはできません」

だが七・六ミリ弾が閃光と共に撃ち出される前に、やや後方で編隊を組む仲間と全く同じ顔をした量産型戦乙女が直上からの一撃で地面に叩き付けられた。固い軍用ブーツで覆われた右足と真鍮製の空薬莖が散らばる土の間に挟まれた顔面が砕けて頭蓋骨の破片と脳漿が四方八方に飛び散り、両眼窩から目玉が勢い良く飛び出す。

「一度部下を死なせた指揮官はその後もずっと死者と共に戦い続けます」

傷付いたヴァルキリーと彼女の戦友は誰に向けられているか定かではない涼しげな声を耳にして共に赤い血と黒い煤で薄汚れた顔を上げた。

「つまり死者の魂が一生纏わり付いてくるということですよ」

百七十センチ以上の長身の腰から伸びる背部飛行ユニットの支持架と背中スペースに

黒い髪を靡かせ、袖と裾を短く切り詰めたタイガーストライプパターン迷彩服の間から彫刻のように見事かつ発達した腹筋を覗かせている新たな戦乙女は紫色の双眸から伸びるレンズ越しの冷たい視線を数で勝る空の敵へ向けた。

「ですが死の王でもあるこの私は何千何万という死者の靈魂に纏わり付かれていながらもご覧のように高い冷静さを保っています」

背部飛行ユニットから左右に大きく広がる前進翼——敵味方識別用の黄色い三角形と、シャローム学園軍所属を示す六芒星が描かれている——に帯びた粒子の輝きが青から赤へ変わり、瞬きの直後に濁りなき瞳の色も準じる。

「それは私が」

どこか他人事じみた響きさえも声に含ませる少女は左足を前に出し、先程殺害した敵を蹴り飛ばしつつ右足を下げ、最後に左手を自分に向け迫るクローンヴァルキリー達に翳す。

「イスラエルという」

特殊部隊用に改造が実施されたPKM軽機関銃は右手に携えられていたが、その先端は血がたっぷりと染み込んだ土に向けられているだけだった。

「道徳的にも社会的にも正当化されたユダヤ人国家の歯車だからです」

ヴァルキリーのみが展開を可能とするマナ・フィールドを砲身状に変形させたサブラはその中心部から爆発的な破壊力を持つ熱線を放つ。

スパイラルビームと敵対勢力が呼称する閃光の潮流に巻き込まれた華奢な肢体が次々に

超高温によって泡立ち、最初に急膨張した眼球が、続いて全身の筋肉が弾け飛び、最後に残った骨がいとも簡単に木っ端微塵となった。

「凄……」

一瞬にしてシヨナイ平原に展開する難敵を殲滅した援軍の後ろ姿を見たヴァルキリーの戦友が弱々しくではあるが感嘆の声を漏らす。

「バズ2・1、目標の除去に成功。これより帰投します」

表情一つ変えず、負傷した自分達を一瞥もせず粒子の色を青に戻して飛び去る戦乙女の名前を重い足取りで再び歩き始めたヴァルキリーは知っていた。

「あれがサブラ・グリーンゴルド……！」

一つは自分達と同じ学園に所属する、最も頼りになる味方として。

もう一つは、自分は絶対に辿り着けないヒエラルキーの最上位に立つ嫉妬の対象として。



一九五〇年九月十一日。

陽の光に照らされるアルカ西部ツルオカスタン・カモ自治区の一角に毎朝恒例となったレア・アンシエルの大声とフライパンを金槌で連打する音が響き渡った。

「誰かと思ったらレアさんですか……相変わらずやかましい人ですね」

学生寮や図書館等が並ぶシャローム学園生徒達のキブツと呼ばれる生活共同体地区内に建つ同校学生寮の一室でこれまた毎朝恒例のやりとりが始まる。

「やかましいとは何よ！ いい歳こいたアンタを毎日起こしてやってんのに！」

肩口まで伸びる栗色の髪を持つシャローム学園の予備役ヴァルキリーは、切れ長の目の周囲を引き攣らせつつフライパンの先を機密保持の観点からタスクフォース・ハヘブレを指揮する同校の最強戦力と姉妹同然の関係にあることになっているS中佐に向ける。

「さっさと起きろっつーの！」

にも関わらず、本人同様の美貌を持つ少女が眼鏡も掛けずにまたシーツに包まり始める様子を見たオリードラブ一色の軍服に身を包むレアは汗臭い生地を強引に剥ぎ取った。

「――ッ」

そして何故かパジャマに下半身裸という衝撃的な姿でベッド上をのたうち回る同居人を見て顔を真っ赤にしたレアは、このサブラ・グリーンゴールドがああああ、と怒声を上げて彼女の頭を綺麗に手入れされているフライパンで思い切り殴り付けた。



「軍曹、あれは一体何なんですか？」

「俺に聞くな。誰も知らなくていいんだ」

ヘルメットにミツネフェットと呼ばれる独特の擬装用カバーを被せ、重装備に身を包むシヤローム学園軍の若いプロトタイプ達は時折そんな会話を交えつつアルカ誕生以前には月山と呼称され、学園同士の戦鬪により国家間の問題を解決する永久戦争地帯の水事情を現在一手に引き受けるルナ・マウンテンのダムの周囲に布陣していた。

「おやおや、フツパーとその保護者のお出ました」

山肌沿いに作られた自動車専用道路に並ぶ、アルカにおけるイスラエルの代理勢力ではシヨットとも呼称されているセンチュリオン中戦車……その砲塔上面ハッチから上半身を出して双眼鏡を覗き込んでいた乗員はダムの水面に浮かぶ物体から少しずつ自分達の方へ近付いて来るジープに乗った二人組にレンズを向ける。

「皆さん、ご苦勞様です」

ヴァルキリー特有の強化された聴覚で戦車兵の自分に対する悪口を一字一句聞き逃さず、自分発の罵詈雑言は三分で忘れるにも関わらず人に言われるといつまでも根に持つ歯車は後で彼のブーツにレアに捕まえさせたムカデもしくはヘビを放り込むことを決意しながらダム脇に臨時司令室として設営されたテントに足を踏み入れた。

「中佐、十分前にこのようなメッセージが」

中のモニターに映っていたリング付きゴムボールをスプレーで銀色に塗ったようにしか見えない外見の未確認飛行物体を見て顎に手を当てたサブラに将校が一枚の紙を手渡す。

「メッセージ？」

いつもレアが洗濯している上着の右胸と左胸にそれぞれ空挺徽章とシャローム学園海軍特殊部隊シャイエット13の徽章を付け、左肩部に赤いベレー帽を嵌めている戦乙女が受け取った再生紙と一緒にテントへと入ったレアも覗き込む。

『無用な争いは避けようではありませんか。責任者の方と話し合いたいと思います』

それから七分十二秒後、二人は突如ルナ・マウンテンに現れた円盤の中を進んでいた。「どうぞお進みください」

灰色で半円状になっている通路の曲がり角から現れた全身にアルミホイルを巻き目元をサングラスで隠す男性の登場にレアは声を上げて驚き一瞬立ち止まるも、一方のサブラスさも当然のように「ありがとうございます」と返礼して彼の前を通過する。

「はじめまして」

管制室に案内された二人を赤い腕章を付けたアルミホイル男が出迎えた。

「我が拠点であるマザーシップへようこそ」

どうやらこの人物が最高指揮官のようだ。彼の両脇には先日ショナイ平原でシャローム学園軍に突然の攻撃を仕掛けてきたのと同じクローンヴァルキリーの姿がある。

「未来のアルカを担う方々にお会いできて嬉しく思います」

レアはあんなこと——自分達にいきなり奇襲攻撃を仕掛けておいてよく言うわよと口に出しそうになったが寸前で堪えた。

「先日の一件については謝罪致します」

だが彼女の怒りと不快感は本人の意思に反して露骨に表情に出てしまっていたらしく、黒いサングラス越しにそれを感じ取った最高指揮官は深々と頭を下げた。

「多数の犠牲者が出てしまったこと、何の申し開きも行うつもりはございません」

しかし、と並び立つサブラとレアを順に見たアルミホイル男は付け加える。

「過去を変えるべく一九四二年にタイムスリップした我々の同志が理屈抜きでその時代の人々に殲滅されてしまったこともまた事実なのです。だから私達は圧倒的な科学力の差を見せ付け、我々と戦うことの愚かさを知って頂いた上で話し合いたかったのです」

「一九四二年？ どういうこと？」

何様のつもりだ——レアの胸中で押さえ込んでいた不快感と怒りが再び燃え始め、短い質問の中にも糾弾めいた響きが混じった。

「二〇一五年現在、グレン&グレンダ社は崩壊し、世界は国家による自治独立が行われるアポカリプス・ナウ以前の形に戻っています」

「容易に想像できる未来ですね。アルカにおける代理戦争は辛うじて国家間の問題ならば解決できるかもしれませんが、その狭い枠組に囚われるとは限らない民族同士や宗教間の衝突には一切対応することができません。私如きにも理解できる話です」

元々の質問者が理解不能な文字列の並びを聞かされて口を半開きにする一方、サブラは良く言えば客観的に、悪く言えば他人事のような口調で最高指揮官に返す。

「だからこそ私達は混沌を極める二〇一五年の八月十四日から一九四一年と一九四二年に

未来を変えるべくそれぞれタイムスリップしたのです」

グレン&グレンダ社残党の最高指揮官は穏やかな口調で続けた。

「一九四一年に向かった私達は地道な啓蒙活動を行いました。ですが急進派は遅々として状況が変わらないことに苛立ち、独断で一九四二年のこの時代へとやって来ました」

噂レベルではあるが、レアも八年前にグレン&グレンダ社の残党が未来から現れ、当時ヴォルクグラード人民学園内で絶大な権力を誇っていたマリア・パステルナーク一派に完全殲滅されたという話は聞いたことがある。だが自分の周囲で起きていることを冷静に分析すると、どうやらそれは本当だったらしいことを彼女は自覚せざるを得なかった。

「では、皆さんは何故今になって表立っての行動を開始したのですか？」

最高位の情報閲覧権限を有し、八年前に発生した事案の全容を知っている可能性もあるサブラは相変わらず涼しげな響きを唇の間から発する。

「その理由は……」

直後に最高指揮官が発した言葉は、レアにグレン&グレンダ社の残党勢力が今後一切の相互理解が不可能な殲滅すべき集団であると再確認させるのに相応しいものだった。



「非常に不愉快だね」

前月に行われたヴェーザーシュタデイオン戦争の非建設的な傷跡が残るアルカ南東部の学園都市タカハタベルク——その中に建つSW社の営業所内で、同社の最高責任者であるエーリヒ・シュヴァンクマイエルは報告書の文面を見て忌々しげに首を傾げた。

「シャローム学園の行動には何一つ筋が通っていない」

左目を眼帯で覆うボーイッシュな乙女然とした姿の少年を今不機嫌にさせているのは、彼と深い繋がりを持つ組織が自分への報告なしに行動を起こしたという事実だった。

「しかし懲りずにまた出てきたグレン&グレンダ社残党の悪行は正当化できんでしょう」

長方形でこれといった特徴のないヨーロッパ風の巨大な建物内にある執務室にいるのは、紆余曲折と幾多の死闘及び度重なる愛憎劇を経てグレン&グレンダ社からアルカにおける国家間代理戦争の全てを任される立場を与えられたプロトタイプの王だけではなかった。

「奴らは自分達の子孫を増やすため、あちこちから数多くの女性プロトタイプを拉致してレイプ、無理矢理妊娠させて何ダースという子供を産ませています」

鼻筋に横傷を走らせる同社所属のヴァルキリー、ソノカ・リントベルクがジャージ姿でソファに横たわりながら傍らに置かれた写真を手にとって見る。

「マリア政権下のヴォルクグラードと良い勝負ですよ」

白黒の中には妊娠し腹部が大きく膨らんだ状態で鎖に繋がれた少女や、糞尿塗れで檻に閉じ込められている幼女の無残な姿があった。

「人間のやることじゃない……」

報告書を荒っぽく机に投げ捨てたエーリヒは大きく溜息を吐きながら椅子を回転させてソノカに体を向け、強い怒りを言葉の端々に滲ませる。

「僕だって立場がなければ今すぐこの手で一人残らず殺してやりたいぐらいだよ」
「そうですね」

ソノカはスーツに瘦躯を包むかつての上官に同意の言葉こそ返したものの、必要以上に回りくどい方法を選んだ末に平然と人としての品性をあっさり捨て去るというアルカではごく一般的な事象とそれに付随する悲劇についてあまり関心を持ってはいなかった。

むしろ彼女の関心は、あの未来人達が一九四一年に送り込まれたのは果たして大いなるスパゲッティ・モンスターのご意思によるものなのかどうかという点だった。



「殺さないでくれ！」

マザーシップの船内で両手を上げ降伏の意思を示した全身アルミホイル姿の男の頭部が散弾を叩き込まれて吹き飛び、骨混じりの湿った肉片が管制室の壁を汚す。

「私達は女性を拉致して強姦し子供を産ませただけです！」

首から上が綺麗になくなった仲間の死体が膝から床に倒れ込む瞬間を目の当たりにしたグレン&グレンダ社残党の最高指揮官はサブラ達と入れ違う形で船内に突如侵入してきた

正体不明の武装集団に身の潔白を訴える。

だが返礼代わりに放たれた散弾が男の右手首を吹き飛ばし、続いて絶叫を上げて後ろを向いた銀一色の背中に多数のソ連製小銃弾が食い込んだ。

「嫌だ……死にたくない……私には……使命が……まだ……」

血の海中で瀕死の状態に成り果てた最高指揮官はサングラス奥の目尻に涙を溜め、歯を食い縛って這い蹲り逃げようとするが、AK47自動小銃を構えた雑多な恰好の兵士達の間から現れたウェディングドレス姿のヴァルキリーに体を持ち上げられた。

「アビー・カートライトは正しかったな」

ヴァルキリーは光のない目で未来人を見つつ若干彫りの深い顔に嘲笑を浮かべる。

「腹が立ったから壁を殴るのに腹が立った以上の理由は必要ない」

「君が……君がやっていることは……」

「あ？」

焦げ茶の髪を後ろで結うユライヤ・サンダーランドが気だるげな声を上げると同時に手首から先が失われた、彼女の包帯が巻かれている右手が微震した。

「君がやっていることは……テロと同じ……」

「そんな御大層なもんじゃねえよ」

ユライヤは侮蔑の視線を自分と同じように右手首を失い筋肉が蠢くその断面から鮮血を迸らせて苦悶する二十一世紀の人間に向ける。

「俺がやろうとしてるのはテロなんて御大層なもんじゃねえ」

爪がアルミホイールに食い込み、破れた喉から勢い良く血が溢れて二人の足元を汚す。

「俺がやろうとしてんのはなあ……」

そんなことまで脳足りんに説明してやらなければならぬのか、どこまで自分は弱者に優しくしてやらなければならぬのかとでも言いたげな口調の戦乙女は手に力を込める。

「テロなんかより遥かに幼稚で」

彼女の言葉の一字一句には自分を含むこの世界そのものへの強い辟易が滲み出ている。

「復讐なんかより遥かに下劣な」

そして低い音を立てて最高指揮官の口から鉄臭い液体が噴き出し、

「この世界に対する」

残された三本の手足から力が抜け、白目を剥いた頭が後方に垂れた。

「子供じみた悪足掻きだ」

製本版に続く



<http://humandust.blog.fc2.com/>